

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On sentence-initial positions for particle stranding

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 那須, 紀夫, Nasu, Norio メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1389

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



助詞残留が起こる文頭の位置について*

那須 紀夫

キーワード：助詞残留，焦点化，短縮応答文，FocP 指定部

1. はじめに

日本語では項が随意的に脱落することがあるが，その場合には付属する助詞も一緒に脱落することが必要で，助詞だけを残留させることは不可能である。

(1) A: 何を花子にあげたの？

B: 指輪を Ø (*に) あげたんです。

ところが，最近の口語では，(2B) のように助詞を文頭に残留させる発話が頻繁に観察されることが指摘されている (Hayashi (2001), 吉田 (2004), 有田 (2005, 2009), 林 (2005), Sato and Ginsburg (2007))。本稿ではこの現象を助詞残留と呼ぶことにする¹。

(2) A: 京都じゃなくて大阪に泊まることにしたの？

B: Ø に泊まることにしたんです。

上述の先行研究では助詞残留は単に「文頭で」起こるとされているが，本稿では問題の「文頭」の位置が真の意味での文の先頭部ではなく，それよりも内側，具体的には焦点化が起こる階層の先端部であることを示す。第2節で助詞残留が焦点化構文の一種であることを述べ，第3節ではこの構文が焦点化が起こる階層への移動によって派生されることを示す。最後に第4節で焦点化タイプの助詞残留と提題タイプの助詞残留を比較し，本稿の分析が別の角度からも支持されることを示す。

* 本稿は対照研究セミナー（2010年12月23日）において発表した内容をまとめたものである。当日のセミナーの場で有益な質問・コメントを下された方々に謝意を表したい。なお，本研究は，日本学術振興会学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））の援助を受けている（「文頭における自立語化および文の外縁部の構造に関する研究」（課題番号 23520469））。最後に，本稿における不備は全て筆者に帰するものである。

¹ 厳密に言うと，助詞残留は幾つかのクラスに下位分類される。例えば4.2節で触れるように，提題の「は」の残留は本稿で扱うタイプの助詞残留とは分布や統語的性質が異なる。「は」の残留については有田 (2005, 2009), Nasu (2011) を参照。

2. 焦点化構文としての助詞残留

助詞残留文に生起する助詞（以下、残留助詞と呼ぶ）は対照焦点を標示し、強勢を伴って発音される。次の例を見てみよう。太字部分は強勢が置かれる箇所である。

(3) a. A: (太郎じゃなくて) **次郎**が花子を叱ったの？

B: {**次郎**が／**Ø**が／***Ø**} 叱ったんです。

b. A: 花子は (太郎じゃなくて) **次郎**を叱ったの？

B: {**次郎**を／**Ø**を／***Ø**} 叱ったんです。

c. A: 太郎は (大阪じゃなくて) **東京**に行ったの？

B: {**東京**に／**Ø**に／***Ø**} 行ったんです。

質問では「次郎」「東京」に強勢が置かれ、これらが質問の焦点であることが音韻的に明示されている。その一方で質問の前提になっている述語の部分には強勢が置かれていない。返答には質問の焦点に対応する構成素が含まれていなくてはならない。(3a-c)では強勢を伴った「次郎」「東京」がそれに相当するが、興味深いのは、これらの名詞句を脱落させ、強勢を伴った助詞だけを残留させても同じ効果が得られることである。

ある事象の存否が別の事象と対比される形で問題になる場合、今度は疑問文中の述語部分が強勢を伴った焦点となる。

(4) A: 太郎が花子を (褒めたんじゃなくて) **叱**ったの？

B: **叱**ったんです。

このような疑問文に対する返答の中心となるのは問題の事象の存否に関する情報であるから、返答文でも述語に強勢が置かれ、それが焦点要素であることが音韻的に示されることになる。この環境で焦点化されるのは述語のみでなければならず、(5a, b)のように述語以外の成分も焦点化した文を(4A)に対する返答に用いることはできない。そして、この環境では助詞残留文も不適格となる。(5a', b')を参照。

(5) a. ***太郎**が叱ったんです。 a'. ***Ø**が叱ったんです。

b. ***花子**を叱ったんです。 b'. ***Ø**を叱ったんです。

同様のパターンは、「が」や「を」以外の助詞が現れる場合にも観察される。

(6) A: 太郎は大阪に (住んでるんじゃなくて) **通**ってるの？

B: {***大阪**に／***Ø**に／**Ø**} **通**ってるんです。

残留助詞が焦点を標示するのであれば、焦点化に固有の特徴を他にも持っているはずである。焦点要素は主題要素とは幾つかの点で対照的な振り舞いをする事が知ら

れている。例えば、主題化された構成素が再述代名詞と共起できるのに対して、焦点化された構成素は共起することができない (Saito (1985), Cinque (1990), Rizzi (1997) 等)。また、数量詞 (を含む構成素) の主題化は不可能だが、焦点化は可能である (Rizzi (1997); Kuno (1973), Tomioka (2007), 寺村 (1991) も参照)。次の例が示しているように、これらの特徴に関して、焦点化と助詞残留は同じパターンを見せる。

- (7) a. A: 太郎は (東京からじゃなくて) **品川**から乗ってきたの?
B: {**品川**から/∅から} 太郎は (*そこから) 乗ってきたんです。
b. その帽子は、店の人がそれを買った人を覚えていました。
- (8) a. A: 男子の誰かじゃなくて**女子**の誰かに渡したの?
B: {**女子**の誰かに/∅に} 渡したんです。
b. 道を歩いていたら、誰か {が/*は} 突然叫んだんです。

3. 残留助詞の焦点化移動

3.1 移動分析

前節では助詞残留が焦点化現象であることを見た。Rizzi (1997) は、焦点要素は文の命題部分に相当する TP 領域ではなく、それよりも上位にある CP 領域に出現すると述べている。また、CP 領域は単一の階層ではなく、談話に関わる情報を具現化する複数の階層から成ると考え、次のような階層の配列を提案している。

- (9) 分裂 CP 仮説: ForceP > TopP > FocP > FinP

最上位にある ForceP は節タイプや表現類型を決定する要素が出現する階層である。その下の TopP には主題要素, FocP には焦点要素が出現する。FinP とは文の定形/非定形を決定する要素が生じる階層である。この仮説の下では、焦点要素は TP 内部から FocP の指定部へと移動すると分析される。これを援用して、残留助詞も同様の移動をしてみると考えてみよう。すると (10) の B の返答は (11) のような構造を持ち、元々 TP 内部にあった「∅で」は焦点化移動によって FocP 指定部へと移動することになる。

- (10) A: 太郎が**言語学会**で発表するの? – B: ∅で発表するんです。

- (11) ... [_{FocP} ∅で_i [_{FinP} [_{TP} (太郎が) _{t_i} 発表するんです

この移動が起こっている根拠となるのが、いわゆる短縮応答文 (short answer) に

残留助詞が生起できるという事実である。短縮応答文とは、下の (12Bb) のように、返答の核となる要素だけを用いる返答のことである。

(12) A: 誰に会ったの? – Ba: 太郎に会ったんです。 / Bb: 太郎にです。


短縮応答文には助詞残留の形を用いることが可能である。

(13) A: 先週は 90 ページまでじゃなくて、100 ページまで読んだの?

B: Ø までです (ね)。

Merchant (2004) や Nishigauchi (2006) は、短縮応答文は返答の核となる構成素の焦点化移動に加えて FinP (Merchant の分析では TP) が省略されることによって作られると述べている。それに従うと、(12Bb) の派生は概略次のようになる。

(14) [FocP 太郎に [FinP __ 会ったん] です] (網かけの部分が被省略箇所)



短縮応答文の派生が焦点化移動を伴っていることは、質問・返答の核が名詞句ではなく小節 (small clause; SC) の述語である場合を考えるとはっきりする。小節の述語とは、次例の「邪魔に」のような要素のことである。

(15) 太郎は [sc 花子を邪魔に] 思った。

益岡 (1987) や Kikuchi and Takahashi (1991) が指摘しているように、日本語の場合、小節の述語を元位置から移動させた文 (16) は容認度が低くなる。注目すべきなのは、小節述語を残した短縮応答文 (17B) も同様に文法性が低下することである。

(16) ?*邪魔に_i 太郎は [sc 花子を_t] 思った。

(17) A: 太郎は花子を疎ましく思ってるの? – B: ?*いえ、邪魔にです。

この並行性は (16) と同じく (17B) にも小節述語の移動が関与していることを示している。

短縮返答文に焦点化移動が関与していることを示すもう一つの根拠は、短縮応答文がいわゆる島の制約を受けることである。

(18) a. 太郎が [NP [CP フランスに行った] 人] から絵葉書を貰ったんです。

b. *フランスに_i 太郎が [NP [CP_t 行った] 人] から絵葉書を貰ったんです。

(18b) では「フランスに」が複合名詞句の内部から移動しており、これが非文の原因になっている。短縮応答文の場合にも、同様の非文法性が観察される。

(19) A: 太郎がイタリアじゃなくてフランスに行った人から絵葉書を貰ったの?

B: * {フランスに / Ø に} です。

短縮応答文が焦点化移動と FinP の省略によって派生されるという分析を採用すると、(19B) には (18b) の場合と同じ表示が与えられる。唯一の違いは、(19B) の場合には次に示すように FinP の省略が起こることである。(網かけ部分は被省略箇所)

(20) [_{FocP} {フランスに_i/∅に_i} [_{FinP} 太郎が [_{NP} [_{CP} た 行った] 人] から絵葉書を
貰ったん] です]

この表示からも分かるように、焦点要素は省略された FinP の内部にある複合名詞句からの移動を経て FocP 指定部に表出している。(18b) の場合と同様に、この移動が(19B) の非文法性をもたらしているのである²。

小節の述語が短縮応答文に生起しないこと、そして短縮応答文が島の制約を受けることから、短縮応答文の派生には焦点化移動が関与していることが分かる。したがって、(13B) の短縮応答文に生起している残留助詞も、TP 内部から FocP 指定部に移動したものであると分析できる。

3.2 FocP が存在しない文

助詞残留が FocP 指定部への移動を伴う現象であるならば、FocP が存在しない文では助詞残留が起こらないことが予想される。本節ではこの予想が正しいことを示す。

益岡 (1989: 199) は、疑問文には叙述されている事態の存否を問題にするタイプ(存在判断型)と、ある事態の存在を前提とした上で、その事態の叙述の仕方を問題にするタイプ(叙述様式判断型)があることを指摘している。

(21) a. 選手たちは泣いていますか。 (存在判断型)

b. 選手たちは泣いているのですか。 (叙述様式判断型)

Kuwabara (2008) はこの違いが文構造の違いを反映したものであると述べ、それぞれのタイプの疑問文に対して次のような構造を与えている。

² 因みに、焦点要素だけを残すのではなく (i) のようにそれを含む複合名詞句全体を残すと、適格な文になる。

(i) [_{NP} [_{CP} {フランスに/∅に} 行った] 人] からです。

強勢の置かれ方からも分かるように、焦点化の対象となるのは本来「に」で標示された構成素のみであるが、この文ではそれ以外の部分も FocP 指定部に移動していることになる。Nishigauchi (1990) や Watanabe (1992) が論じているように、日本語では LF での *wh*-移動が島の制約に抵触する恐れがある場合に、違反を回避するためにこのような随伴 (*pied-piping*) が起こることがある。(i) の事例は同様の随伴が頭在的に起こったものであると考えられる。

(22) a. 選手たちは [TP 泣いています] か？

b. 選手たちは[FocP [FinP [TP 泣いている] Fin-の] Foc-です] か？

FinP 及び FocP を持つ叙述様式判断型の疑問文はいわゆる「のだ」文をベースにしており、Kuwabara はこの構文に現れる「の」と「だ」をそれぞれ FinP と FocP の主要部であると分析している。叙述様式判断型の疑問文とは対照的に、存在判断型の疑問文には FocP が不在のため、この種の疑問文では文中の構成素に強勢を置いてそれを焦点化することが困難であると予想される。事実 (23a, b) が示しているように、対照焦点を担う要素は叙述様式判断型の疑問文には生起できても、存在判断型疑問文には生起できず、(22a, b) の分析の妥当性が裏付けられる。

(23) a. *大阪じゃなくて**東京**に行きましたか？

b. 大阪じゃなくて**東京**に行ったんですか？

疑問文と同様の違いが、平叙文の場合にも観察される。

(24) A: 大阪じゃなくて**東京**に行ったんですか？

Ba: ?? {**東京**に/Øに} 行きました。

Bb. {**東京**に/Øに} 行ったんです。

(24A) は行くという事態の存在を前提とした上で行き先を問題にする質問なので、返答には、質問の焦点、すなわち行き先が明示されなければならない。上述のように「のだ」文には FocP が存在するので、(24Bb) では焦点要素「**東京**に」あるいは「Øに」が生起する位置が保証される。対照的に、非「のだ」文である (24Ba) は FocP を欠いており、焦点要素が生起できる構造上の位置が保証されない。こうした文で助詞残留が困難であるという事実は、助詞残留が FocP 指定部への焦点化移動を伴う現象であることを裏付けている^{3,4}。

³ (24Ba) で焦点要素を脱落させた文（「行きました」）も、(24A) への返答としては不適格である。本文でも述べたように、行き先を問題にしている質問 (24A) への返答には行き先を表す句が必要になるからである。

⁴ 次の対話で B の発話に「言語学会に」が生起すると文法性が低下するのも、非「のだ」文に FocP が存在しないことが原因である。

(i) A: 今年は言語学会に行きますか？— B: (??言語学会に) 行きます。

(iB)で「言語学会に」を残すと、久野 (1978) の言う不完全省略の制約に抵触する。久野によると、新情報となる要素を除いて、文脈から復元可能な要素は最大限省略されねばならず、(iB) の「言語学会に」のように復元可能であるにも拘わらず省略されずに残された要素は自動的に（対照）焦点要素として解釈される。しかしながら、FocP を欠く(iB)はこの焦点要素が生起する位置を提供することができない。

4. FocP 指定部からの移動

4.1 短縮応答文再考

ここで再び短縮応答文での焦点化について考察してみたい。短縮応答文では、応答の焦点となる要素と推量の副詞「たぶん」の位置関係をめぐって、次のような対立が見られる。

(25) A: 花子は (太郎からじゃなくて), 次郎からメールをもらったの?

Ba: たぶん {次郎から/Øから} だろうね。

Bb: * {次郎から/Øから} たぶんだろうね。

一方, 短縮が起こらない返答の場合には, 焦点要素が「たぶん」に先行する語順が許される。

(26) A: 花子は (太郎からじゃなくて), 次郎からメールをもらったの?

Ba: たぶん {次郎から/Øから} メールをもらったんだろうね。

Bb: {次郎から/Øから} たぶんメールをもらったんだろうね。

(25Bb) と (26Bb) の差はなぜ生ずるのだろうか。

この疑問を解く第一歩として, (25Bb) の派生を考えてみよう。

(27) {次郎から_i/Øから_i} たぶん [_{FocP} *t*_i [_{FinP} [_{TP} *t*_i メールをもらった] *n*]
Foc-だ] Top-ろう。

副詞「たぶん」は主題句や判断のモダリティ要素「だろう」などが生起する階層 (すなわち TopP) に現れることが知られている (南 (1974), 益岡 (1991), 野田 (1995) など)。したがって焦点要素は最初に FocP 指定部へと移動した後, さらに「たぶん」に先行する位置へと移動することになる。ここまでのプロセスは (26Bb) の場合も同様である。短縮応答文の派生では, この後さらに FinP の削除が起こるのであるが, 実はこのプロセスに問題がある。

様々なタイプの機能範疇の補部の省略を扱った Lobeck (1995) によると, 機能範疇主要部の補部が省略できるのは, 機能範疇の指定部が主要部と一致関係を持つ有形の要素によって占拠されている場合である。次の例を考えてみよう (網かけ部分が被省略箇所)。

(28) a. John met someone, but I don't know [_{CP} who_i C [_{TP} he met *t*_i]].

b. *John insisted that he met Bill, and Mary reported to Jane [_{CP} Ø that [_{TP} he met Bill]].

(28a) では CP 指定部が音形のある要素 *who* によって占拠されている。そのため C の補部である TP が省略可能となる。一方 (28b) の CP 指定部は空になっている。この文では TP 省略が不可能である。

これを踏まえて次の文を考えてみよう。この文では最下位の TP (網かけ部分) が省略されている。

(29) *John met someone, but I don't know [_{CP} *who*_i C [_{TP} Mary said [_{CP} *t*_i that
[_{TP} he met *t*_i]]]]

この文は (28b) と同様に非文である。この文では *who* が最下位の CP 指定部を経由して、より上位の CP 指定部へと移動している。Lobeck (1995) の分析を採用すると、最下位の CP の指定部にあるのは音形がない痕跡であるため、主要部 *that* の補部 TP を省略した (29) は非文となる。(27) で FinP を省略した場合にも、これと同じことが起こる。すなわち、FocP 指定部にあるのは焦点要素の痕跡なので、Foc 主要部の補部である FinP は省略することができない。それ故これを省略することによって作られた (25Bb) は非文になってしまうのである。

4.2 提題の「は」の残留と焦点要素の相互関係

4.1 節では、(25Bb) の非文法性が補部省略条件の違反によるものであり、焦点要素の移動によるものではないことを見た。現に FinP 省略が起こらない (26Bb) では焦点要素が「たぶん」に先行することができ、この語順を作り出す移動操作そのものには問題がないことが分かる。(26Ba) と (26Bb) の2つの語順が可能であることから、後者を作り出す移動は随意的操作、すなわちかき混ぜであると考えられる。本節ではかき混ぜによって「たぶん」の前に移動する焦点要素が句構造上のどの位置に着地するのかを考える。

始めに、次の例を見てみよう。

(30) A: 携帯はどの機種が流行ってるの？

B: Ø はソニーの機種が流行っています。

(30B) は提題の助詞「は」が残留している例である。この助詞は (30A) で主題として提示されている「携帯」を受け、それを (30B) の主題として提示していると解される。提題タイプの「は」の残留 (以下「Ø は」と表記する) は、本稿で問題にしてきた焦点化タイプの助詞残留とは性格を異にする。次の例が示しているように、提題タ

イプの「 \emptyset は」と焦点要素との間には語順の制約があり、前者が必ず後者に先行する。

(31) A: 太郎は大阪じゃなくて**東京**に行ったの？

Ba: \emptyset は {**東京に**/ \emptyset に} 行ったんです。

Bb: * {**東京に**/ \emptyset に} \emptyset は行ったんです。

このことは、焦点要素が FocP 指定部に生起するのに対して、提題の「 \emptyset は」がそれよりも上位にある階層に属していることを示唆している。「 \emptyset は」についての詳細な分析は Nasu (2011) に譲るが、以下にこの観察を支持する根拠を幾つか挙げる。

提題タイプの残留助詞は焦点化タイプとは異なり、TopP に属する副詞「たぶん」に後続できない。

(32) 提題タイプ

A: 太郎は君が留学することに反対するんじゃないの？

Ba: *たぶん \emptyset は反対するだろうね。

Bb: \emptyset はたぶん反対するだろうね。

(33) 焦点化タイプ (= (26))

A: 花子は (太郎からじゃなくて)、**次郎**からメールをもらったの？

Ba: たぶん {**次郎**から/ \emptyset から} メールをもらったんだろうね。

Bb: {**次郎**から/ \emptyset から} たぶんメールをもらったんだろうね。

これは「 \emptyset は」が FocP には生起しないことを示している。加えて、次の (34Ba, Bb) に見られる対立は、「 \emptyset は」が TopP とは構成素を形成しないことを示している。

(34) A: 太郎は君が留学することに反対するんじゃないの？

Ba: \emptyset は説得するつもりです。[TopP たぶん反対するだろう]-けど。

Bb: *説得するつもりです。[TopP \emptyset はたぶん反対するだろう]-けど。

したがって、「 \emptyset は」は TopP よりも上位の階層に生起すると考えられる。

以上の議論をまとめると、(31Ba) には次のような構造が与えられる。

(35) [FP \emptyset は ... [TopP [FocP {**東京に**/ \emptyset に} 行ったんです]] ...]

FP とは「 \emptyset は」が生起する階層に対して便宜的に与えた名称である (この階層の性質および句構造上の位置づけに関する具体的な考察については Nasu (2011) を参照)。

最後に、かき混ぜによって FocP 指定部から移動した焦点要素の位置について考えてみよう。

(36) A: 太郎は大阪じゃなくて東京に行ったの？

Ba: Ø はたぶん {東京に/Øに} 行ったんだろう。

Bb: Ø は {東京に_i/Øに_i} たぶん _t 行ったんだろう。

Bc: * {東京に_i/Øに_i} Ø はたぶん _t 行ったんだろう。

(36Bb) は (36Ba) の語順を基にして、焦点要素「東京に」「Øに」を副詞「たぶん」の前に移動することによって派生される。(36Bc) は焦点要素を「Øは」の前に移動することができないことを示している。副詞「たぶん」が TopP に属していることから、(36Bb) の焦点要素は TopP に付加されたものであると考えられる。

5. 結論

本稿では焦点化タイプの助詞残留現象を取り上げ、この構文に現れる残留助詞が句構造のどの位置に現れるのかを検証した。短縮応答文で助詞残留が可能であることから、助詞残留文では残留助詞が焦点化のために FocP 指定部に移動することが明らかになった。また、提題タイプの助詞残留との比較に基づき、一見文の先頭部で起こるかに見える焦点化タイプの助詞残留が、実際にはそれよりも内側で起こることを示した。

参考文献

- 有田節子 2005 「対話における「文頭の『は (wa) -』」の機能について」『日本語用論学会発表論文集』創刊号, 1-8.
- 有田節子 2009 「「裸のハ」についての覚え書き」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』16, 95-107.
- 林誠 2005 「「文」内におけるインターアクション—日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって—」串田秀也・定延利之・伝康晴 (編)『活動としての文と発話』1-26. 東京: ひつじ書房.
- 久野暲 1978 『談話の文法』東京: 大修館書店.
- 益岡隆志 1987 『命題の文法』東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 1989 「モダリティの構造と疑問・否定のスコープ」仁田義雄・益岡隆志 (編)『日本語のモダリティ』193-210. 東京: くろしお出版.

- 益岡隆志 1991 『モダリティの文法』 東京：くろしお出版.
- 南不二男 1974 『現代日本語の構造』 東京：大修館書店.
- 野田尚史 1995 「文の階層構造からみた主題ととりたて」 益岡隆志・野田尚史・沼田善子（編）『日本語の主題ととりたて』 1-35. 東京：くろしお出版.
- 寺村秀夫 1991 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』 東京：くろしお出版.
- 吉田智行 2004 「主題の省略現象—比較統語論的考察」 論集編集委員会（編）『日本語教育学の視点』 291-305. 東京：東京堂出版.
- Cinque, Guglielmo. 1990 *Types of A'-Dependencies*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hayashi, Makoto. 2001 Postposition-initiated utterances in Japanese conversation. Margret Selting and Elizabeth Couper-Kuhlen (eds.) *Studies in Interactional Linguistics*, 317-343. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Kikuchi, Akira and Daiko Takahashi. 1991. Agreement and small clauses. Heizo Nakajima and Shigeo Tonoike (eds.) *Topic in Small Clauses*, 75-105. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Kuno, Susumu. 1973 *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kuwabara, Kazuki. 2008 On the choice of complementizers in Japanese wh-questions and the structure of the left periphery. *Scientific Approaches to Language* 7, 79-102.
- Lobeck, Anne. 1995 *Ellipsis: Functional Heads, Licensing, and Identification*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Merchant, Jason. 2004 Fragments and ellipsis. *Linguistics and Philosophy* 27, 661-738.
- Nasu, Norio. 2011 Topic particle stranding and the structure of CP. Ms. Kobe City University of Foreign Studies.
- Nishigauchi, Taisuke. 1990 *Quantification in the Theory of Grammar*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

- Nishigauchi, Taisuke. 2006 Short answers as focus. *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 9, 1-22.
- Rizzi, Luigi. 1997 The fine structure of the left periphery. Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar*, 281-337. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Saito, Mamoru. 1985 Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications. Doctoral dissertation, MIT.
- Sato, Yosuke and Jason Ginsburg. 2007. A new type of nominal ellipsis in Japanese. *Formal Approaches to Japanese Linguistics 4: MIT Working Papers in Linguistics* 55, 197-204.
- Tomioka, Satoshi. 2007 Pragmatics of LF intervention effects: Japanese and Korean wh-interrogatives. *Journal of Pragmatics* 39, 1570-1590.
- Watanabe, Akira. 1992 Subjacency and s-structure movement of *wh*-in-situ. *Journal of East Asian Linguistics* 1, 255-291.